

デ
イ
ケ
ン
ズ

海老池俊治著

新英米文学評伝双書

CHARLES
DICKENS

1968

東京 研 究 社 出版

ディケンズ

¥350.



KENKYUSHA

新英米文学
評伝叢書

昭和 30 年 6 月 10 日 印 刷
昭和 30 年 6 月 15 日 初版発行
昭和 43 年 3 月 5 日 7 版発行

著 者	海 老 池 俊 治
発 行 者	小 酒 井 益 蔵 東京都新宿区神楽坂 1 の 2
印 刷 所	研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂 1 の 2

発 行 所 研究社出版株式会社 東京都新宿区神楽坂 1 の 2
振替口座東京 83761 番

は し が き

本書の内容は、一九五二年一橋大学で行った講義の一部に手を加え、書き足したものである。手を加えるに当って参考した主な書物は、エドガー・ジョンソンのディケンズ傳（一九五二年出版）であるが、今日ディケンズを論じるものに、この書はフォースターの傳記とともに不可欠であろう。

作家の評傳は根本的に作品の理解のためであるという趣旨に従って、傳記的事実は、創作と関連が深いと筆者の考えるものだけを、なるべく簡単に記した。また、このような小冊子中に、夥しいディケンズの全作品を漏れなく均等に論評することは、とうていできないから、作品論も思い切って重点的に取り扱った。筆者の主観的判断に傾きすぎ、重大な誤脱がありはしないかと恐れている。しかし、それにしても、小説家ディケンズ観の少くとも一つは、

卒直に現われていることと思う。

ディケンズの作品からの引用が多きにすぎるかも知れないが、それは直接作品に自身を語らせたいと願ったからである。それらの引用につけた訳文は、手に入る限り既出の訳本から取った。訳者諸氏に無断で訳文を借用したお詫びをすると同時に、こゝで厚くお礼申し上げたい。なお、借用した訳文には訳者名と版本名を記しておいた。その記載がないものは、筆者の訳文である。

最後に、断っておかなければならない。本書は数ヶ所に、すでに発表した筆者の論考を含んでいる。それらに発表の場所を提供された「英語・英米文学講座、英米作家論」（河出書房）、「英語青年」、「英語研究」、「英語世界」等の編集・出版者に、敬意と謝意を表したい。

一九五四年十月

海老池 俊 治

目次

はしがき	iii
一、生い立ち	一
二、「ビックウィック・クラブ遺文録」	一二
三、初期の作品	四四
四、「デイヴィッド・コパフィールド傳」	七一
五、暗轉	一〇三
六、「大いなる遺産」	一二八
七、謎（晩年）	一五三
年表	卷末 1

圖 版

ディケンズ（中年）の肖像	口繪
ディケンズの生まれた家	二
白鹿亭のサム・ウエラー（フイズ筆）	二〇
一八三七年のディケンズ（S・ロレンス画）	四五
マライア・ビードネル	九八
中年の彼女	九九
ギャッツ・ヒルのディケンズ邸	一一一
幕場のピツプとマグウィッチ（映画「大いなる遺産」のスティール）	一三七
公開朗讀をすませて疲労困憊したディケンズ（H・ファーニス筆）	一五四

一、生い立ち

小説家ディケンズは一八二二年二月七日にイギリス南岸の軍港ポーツマス近郊¹で生まれた。チャールズ・ジョン・ハフナム (Charles John Huffnam) と名づけられた。²

父ジョン (John) は海軍経理部の書記であった。職務に勤勉であったが、堅実な人柄とはいえなかった。親切で、のんきで、お喋りで、どこか金銭にだらしないところがあったらしい。後年ディケンズは代表作『デイヴィッド・コッパフィールド』(David Copperfield) 中に、ミコーバー氏 (Mr. Micawber) として彼の倅を写したといわれる。母エリザベス (Elizabeth) は、明るい、氣立てのよい女であったが、いさゝか見栄っぱりで、「ニコラス・ニッケルビー」(Nicholas Nickleby) 中のニッケルビー夫人のモデルになったといわれている。

生い立ち
ジョン・ディケンズの父は従僕から身を起して、ある大家の執事になった。彼の妻は多年



ディケンズの生まれた家

内に職を奉じて、かなり重任についていたから、彼女はジョンに比べて育ちがよかった。見栄っぱりに見えたのも当然であった、といえるかも知れない。

いずれにしても、小説家ディケンズの業績と人間を考えると、父はもちろん、祖父の身分をも無視することはできない。民衆の友であった彼の庶民性が、そこに根ざしているからである。彼の成功と、そしてまた、悲劇の原因の幾分かも、そこに発しているからである。

女中頭を勤めた。つまり、彼等はともに家庭使用人であった。従って、その子ジョンが政府の役人になったとき、それははっきり社会的地位の向上を意味したのである。また、ジョンの妻エリザベスが、氣立てはよいが、見栄っぱりであったことを、右に一言したが、エリザベスの父は実業の経験があり、同じく海軍経理部

一八一四年にジョン・ディケンズはロンドンへ轉勤し、一七年まで一家はロンドンにいたが、この年チャタム(Chatham)へ移った。大会堂町ロチェスター(Rochester)に隣接したこの南英の町と、その附近の風物は、幼いディケンズの心中に深い印象を刻んだ。病身であった彼は、子供らしい運動に興じることなく、たゞ身近かな風物を眺めて、觀察と空想の性辭を養い、手に入る限りの書物を読み耽って、読書の樂しみを知った。要するに、知らず知らず作家的修練の宿命的な第一歩を踏み出したといつてよいであらう。

ディケンズが成人してから、チャタム時代は、最も、というよりも、ほとんど唯一の幸福な思出の時期であつた。彼は度々なつかしいこのあたりの情景を作品中に描いたばかりでなく、結局、近在に家を買つて住んだ。

しかし、やがてその幸福は崩れた。一八二二年ジョン・ディケンズは再びロンドンへ轉勤を命じられた。そして、そのころから放漫な彼の家計が目立って悪化し、間もなく破綻が起つた。チャールズは靴墨工場へ出て、労働をしなければならぬことになった。彼はこの屈辱に打ちひしがれたように感じたが、そのわけは、労働の辛さのためよりも、希望がな

ち 立 い 生

なくなったためであつたらしい。役人の息子であつた彼が少年労働者に身を落したことは、たしかに大きな屈辱であつたに相違ない。しかしまた、先にいったように、彼は家庭使用人の孫でもあつたのである。「民衆作家」としての彼のアイロニーが、早くこの事件に芽ぐんでいることは、いかにも興味深い。

不幸が重なつた。チャールズが労働を始めてから十日ほど後に、父ジョンは借財不拂のために逮捕されて、マーシャルシー (Marshalsea) 監獄へ投獄された。孤独な少年ディケンズは異常な昂奮と苦悩のうちに日々を送つた。ところで、その経験は、はるかあとまでなまなましく記憶に残つて、彼を苛んだようである。例えば、当時彼がひとりで行きつけたコーヒー店の戸のガラス板に、表てに向けて COFFEE ROOM と文字が書いてあつたが、その後どんなコーヒー店にいても、ガラス板の文字をそのときに裏から逆に MOOR-EEFFOC と読むと、衝撃に血を貫かれる、と彼は自叙傳の断片のなかに記してゐる。また、ある日、仕事の途中で急病にかゝつたとき、ポップ・フェイギン (Bob Fagin) という仲間の少年が、介抱して、うちへ送つてくれた。ところが、彼はポップに監獄のことを知らせ

たくなかった。見知らぬ家の前で別れて、自分のうちのように戸を叩いた。そして、出て来た女に、ロバート・フェイギンさんのおうちですかときいた、という逸話を語っている。

MOOREEFFOCという文字はある意味で人間及び作家ディケンズの象徴である。感覚的な、強烈な、倒錯した心象の表われのように見える。一方、労働者仲間の親切を懸命に斥けた少年チャールズの心理は、作家ディケンズのアイロニカルな創作の一面を表わしているといえなくもない。「オリヴァー・トウィスト」(Oliver Twist)中に、彼がフェイギンという名を盗賊團の首領に與えている事実は、偶然であるまい。

数ヶ月後に、ジョン・ディケンズは釈放された。チャールズも靴墨工場から放免されて、学校へ入ることができるようになった。

ち　　立　　い　　生
一八二七年チャールズ・ディケンズはある弁護士の事務員になった。しかし、その職業に気が向かなかつた。同僚の事務員とともに度々劇場へ出かけ、ロンドンの街を歩きまわって、鬱を晴らした。いや、それはたゞ消極的な氣晴らしでなかつた。演劇趣味——實際的にも比喩的にも、演劇的表現は、終生ディケンズの最も大きな関心の一つであつた。そしてまた、

ロンドンの町に営まれる民衆の生活の詳細な觀察は、彼の感性と意欲を育くみ、彼の人生を形造った原動力の一つであった。とにかく、ディケンズは法律家になる氣がなかった。そして、いよいよ自分の將來を決定しようとしたとき、彼が思いついたものは、ジャーナリズムであった。

父ジョンが役所を退職して、¹⁰ジャーナリズムの仕事をしていたことが、この決心の動機になったのかも知れない。少くとも、ジャーナリストの資格を身につけるために、チャールズは父から忠告を受けたに相違ない。速記術を修得して、翌二八年法律事務所を辞し、民法博士会 (Doctors' Commons) で働いたのち、三二年新聞「トルー・サン」(The True Sun) の発刊とともに、その通信員になった。やがて、「モーニング・クロニクル」(The Morning Chronicle) 紙に轉じた。

通信員としてのディケンズはきわめて有能であったということである。しかし、彼は議會やその他政治的集会の模様を、忠実に傳えるだけでは満足できなかった。折にふれて、自分の目に写った民衆の生活の記録を——事實であると同時に印象でもある同胞の生活の報告を、

企てた。文学的創作の試みである。

そのような試みの最初のもの¹¹が、一八三三年十二月「マンスリー・マガジン」(The Monthly Magazine)に掲載されたのを見たとき、彼は喜びと誇りで目がうるんで、人目につくのが恥ずかしかったという。¹² 何にしても、その感動のなから、作家ディケンズが生まれたのである。小説家であったかどうかは別にしても——そうして、創作の喜びを味わい、自分の作品が出版者に受け入れられることを、すなわち、文学的共感が成立することを知った彼は、次々に筆をとって、同種の作品を書き、新聞雑誌¹³に発表した。それらが集められて、書物になったものが、「ボズの素描集」(Sketches by Boz, 1836)¹⁴である。ディケンズの処女出版である。

話が多少前後するが、ディケンズの「生い立ち」について、こゝで一言しておかなければならぬ事件が一つある。それは、彼の初恋である。その相手はマライア・ビードネル (Maria Beadell) とし、彼女の父は銀行家であった。¹⁵ ディケンズが始めてマライアに会ったのは一八二九年であったが、この恋はあらゆる初恋の例に漏れず、いや、それ以上に、純情で、

夢中であつたらしい。ところで、マライアの親がディケンズの身分とその不確かな將來に好意を寄せなかったことはもちろん、彼女自身どれだけ眞面目に彼の思いに反應したのか分らないといわれている。とにかく、この恋は実を結ばなかった。しかし、対象のなかに自我を投入して、それを押し歪め、なまなましい、不思議な迫眞力のこもった映像を描いた小説家ディケンズの性癖が、はっきり現われている点で、この事件は殊に興味深い。事実、彼の作品に、マライアの倂が——むしろ、彼女を素材にしてディケンズが創り上げた、可憐な、魅惑的な少女の姿が、明瞭に現われることは、度々批評家に指摘されている。

なお、ディケンズの結婚は、「ボズの素描集」が出版された年であつた。あとで述べるように、不幸に終つたこの結婚も、最初のうちはばら色のヴェイルがかゝっていたに相違ない。たとえそのヴェイルがディケンズの不條理な恣意の産物であつたにしても。その内側に、新妻カサリン(Catherine)の倂と、失われた初恋の女マライアの倂が、むりやりに重ね合わされていたにしても。

さて、「ボズの素描集」はいうまでもなく習作である。作者の傑作のような豊かな生命の

流露は感じられないであろう。しかし、それは同胞の生活に対する激しい、執拗な、痛ましい同情に満ちている。眞剣な觀察眼がいきいきと働いている。ディケンズ特有の逆説である幻想的な写実の萌芽が、明かに読み取れる。

ディケンズの天才は、この作品ののち、直ちに、爆発的に開花したのであるが、その事実を考え合わせれば、「ボズの素描集」が彼の創作力の展開に対して持つ意義は、はなはだ大きいといわなければならない。

次節以下に述べるディケンズの業績との比較のために、次にこの作品中から、夜のロンドン街頭を描いた文章を、数行紹介しておこう——

But the streets of London, to be beheld in the very height of their glory, should be seen on a dark, dull, murky winter's night, when there is just enough damp gently stealing down to make the pavement greasy, without cleansing it of any of its impurities; and when the heavy lazy mist, which hangs over every object, makes the gas-lamps look brighter, and the brilliantly-lighted shops more splendid, from the